自治体維新

首長インタビュー

鹿児島県阿久根市長

西平　良将 氏

にしひら・よしまさ　1973年兵庫県尼崎市生まれ。95年九州大学農学部卒。卒業後、塾講師などを経て家業の養鶏農家「西平養鶏」を兄と継ぐ。2009年の竹原氏の障害者差別的な記述に強く反発、政治に関心を持つきっかけに。10年1月、反竹原氏の市民団体の発足に参画、同年8月「阿久根市長リコール委員会」の監事に就任。リコール成立を受け行われた11年の出直し市長選挙（1月16日投開票）に出馬し、小差で竹原氏を破って当選。1期目。

混乱を糧に市民との関係再構築

強引な市政運営で首長と議会という地方自治の土台が激しく揺れた鹿児島県阿久根市。出直し市長選で竹原信一前市長を選挙で破った西平良将市長が「対話と融合」を打ち出してから約１年半が経過した。地域住民を二分したかつての混乱は解消され、市政は落ち着きを取り戻している。竹原氏が課題として残した「首長と議会の役割」「官民格差の是正」などの改革に西平市長はどう取り組むのか聞いた。

混乱の象徴、人件費の貼り紙を自ら撤去

2009年４月、当時市長だった竹原氏は「職員の給与が高すぎる」と市役所職員の人件費を記し、各課に張り出した。反発した男性職員が貼り紙をはがすと、怒った竹原氏はその職員を懲戒免職処分にした。その後、竹原氏の処分を取り消した福岡高裁支部の判決が確定、職員は復職した。11年１月、新市長となった西平氏は就任から１年以上経過した今年４月28日に貼り紙を撤去した。

私自身の手ですべてはがした。この人件費の貼り紙は阿久根の混乱の象徴だった。当選直後にはがさなかったのは、私が（竹原氏の）色をなにもかも消し、一切無かったことにしてしまうのは良くない、足跡として残すべきだと考えたからだ。市政への戒めとして一定期間必要だった。新年度に入ってから代わりに「笑顔　丁寧　迅速」のスローガンや各課の仕事の具体的な内容を記した紙を掲示した。内容は市職員に考えてもらった。今年は市制60周年で節目の年でもあり、庁内の雰囲気を明るく変えたかった。

同時に、市役所の正面玄関には01年度から10年度の毎年度の総人件費と職員数の推移をグラフで表示した。竹原氏が「高給」だと批判した市職員に対し、報酬に見合った仕事をしているか、市民はしっかりと見ているぞと伝えたかったからだ。ただ阿久根市は職員数も人件費も減り続けている。竹原前市長は市職員の一人当たりの人件費が高い

禁複製・無断転載

と指摘したが、それは退職金積み立てなどすべてを含めた人件費の数字だ。それらを除いた平均年収は約560万円だ。

竹原氏が市の活性化を目的に発案した公共施設に絵を描く事業だが、これも問題があった。たとえば消防庁舎や訓練施設の壁画はアニメやゲームなど他社が著作権を持つキャラクターが多数含まれていた。これは消防士の訓練の場所として、あまりにもふさわしくないので消した。また市役所の前の広告塔には「ボンタンアメ」のパッケージが描かれていたが、これも企業の広告になるためアメの文字を消し、デザインは残した。

西平市長は竹原氏が専決処分で強行した議員報酬日当制（１日１万円）を月額約26万円に戻した。一方で選挙公約で職員給与を削減した。市議報酬や議員定数削減の議論についてはこれからだ。

議会で市議の日当制を月給制に戻したのは11年１月の、出直し市長選の後だ。いったん元の状態に戻して、同年４月の市議選後に新しく選ばれた議員で議会の中で議論してほしいと思った。議会では同年12月「議員報酬等調査特別委員会」を設けた。継続的に議論しており、判断を待ちたい。議会は独自に自浄作用を発揮してほしい。この議員報酬の件について私や市の執行部が口を出すことは議会軽視だと思う。

当選後、市職員の給与について４年間で15％カットを示した。まず昨年月額平均6.4％減額した。一方、前市長が専決処分で半減した職員のボーナスは元に戻した。市職員の労働組合には労働者としての権利も十分尊重するが、今は頑張って市民に認めてもらうのが大事だと理解を求めている。

竹原前市長と市議会の動き

・08年８月	竹原氏が阿久根市長に初当選
・09年１月	竹原氏がブログで「辞めてもらいたい議員」投票
２月	市議会が「市長不信任」可決、竹原氏は議会を解散
２月	竹原氏が全職員の給与をブログで公表
４月	出直し市議選後の臨時会で「不信任」再可決、竹原氏失職
５月	出直し市長選で竹原氏再選
10年３月	竹原氏、「マスコミは不当報道」と議会出席を拒否
４月	竹原氏「今後は議会でなく専決処分で決める」と言明
12月	西平氏ら反竹原市民グループの解職住民投票で竹原氏再失職
11年１月	出直し市長選で西平氏が竹原氏を破り初当選
２月	市議会リコール住民投票で解散決定
４月	竹原氏、鹿児島県議選に立候補、自民の現職に敗れ落選
４月	出直し市議選で反竹原派が過半数を維持
12月	議員報酬等調査委員会の設置を可決
12年３月	議会基本条例を可決

市議会の2分状況はすでに解消

竹原氏落選後の11年２月に市議会リコール（解散請求）の住民投票があり、有効投票の過半数で解散が決定。同年４月の出直し市議選（定数16人）で反竹原派が10人、竹原派６人が当選した。竹原派は過半数の議席獲得はできなかった。しかし西平体制になってからの市議会における議案の賛否には２派閥が反映されているわけではない。議員各自が自主的に判断しているようだ。

議会には竹原派も反竹原派ももうないと私は感じている。議会と市当局との議論は必要。議会は厳しい目で市の執行部を監視している。こちらも議員には懇切丁寧にぬかりなく対応したい。市議会の透明度は上がったが、正直言うと前の竹原氏が議会にも出席しない、招集もしない、専決処分を繰り返すということで、まともな市政の状態でなく、あまりに透明度がなさすぎたのだ。阿久根の地方自治のイメージを変えたい、市長として責任を果たしたいというこの１年半の私の思いは、議会にも市職員にも伝わっていると思う。

議員の定数削減問題もまず議会で話をしてほしい。市執行部の対応は、議員がどう考えるか、それを受けてからの話だ。ただ竹原氏が唱えたような定数４人という極端に少ない人数にはならない。阿久根市には79の集落がある。これらの住民の要

禁複製・無断転載

望を市政に反映させる適正な議員の数を議会で考えてもらいたい。年末にはその方向性がみえてくるのではないかと思う。

議会基本条例が今年３月の定例市議会で可決された。議員に議会報告会や政策検討会の開催を義務化するよう盛り込んだものだ。竹原氏は議員の報酬と仕事ぶりの釣り合いがとれないと指摘し続けていた。私もある議員が市民に議会報告会をすると言っておきながら、なかなか実行に移していないのを認識していた。今回は、そうした批判を払拭する体制が議員の手でできた。竹原市政の混迷を受けて市民に自分たちの活動をしっかり伝えるべきだという議員の認識が高まり、条例が制定されたのだろう。市民も説明を求めているし議会の透明度も高まる。

竹原前市長時代に好評だった政策は継続

阿久根は人口２万3000人で第１次産業、漁業の町。ただ1990年代は水揚げ高が約72億円あったが昨年は18億円に落ち込んだ。港湾整備を含めて水産施策を充実させる。

地場産業を育てて雇用を拡大、活性化するのが大事だ。地場産業に携わる人が元気でないと地域は良くならない。そこで水産林務課を立ち上げた。また今年度予算で阿久根で、水産物の鮮度維持のための氷代の半額を助成する制度を設けた。林業についても定住促進木造住宅建築補助金を制定した。木造に限るが地元の施工業者が地元から資材を仕入れる場合、それに補助金を出す。

竹原前市政はいわば阿久根市民が通らなければならない道だった。主力の漁獲量減少に加え、新幹線の駅も止まらない、高速道路も未整備と地盤沈下が続いていた。そこに一部市職員の市民への対応が良くなかったのが不満として加わった。私も市長になる前、経営者時代に市に相談に行ったがその職員の姿勢には疑問を持っていた。市には絶対に頼らないぞと思ったほどだ。こうした地域の疲弊感、閉塞感に竹原氏が火をつけ市長として登場した。彼の官民格差是正や市職員、議員批判の発言もよく理解できたし賛同できる点もあった。

私が政治に関心を持ち竹原氏の対立候補となったきっかけは同氏の障害者に対しての差別をうかがわせるブログでの記述（「高度医療が障害者を生き残らせている」）からだ。周辺からは止められた。だが反竹原運動の中心となって活動するうちに、同氏の議会を無視し専決処分の乱発など問題ある行動を阻止する責任があると思って出馬した。

竹原・反竹原の激しい対立は市民を二分した。修復のため対話と市民融和を目的に昨年７月に「市民まちづくり100人委員会」を設置。約３カ月かけて市民の代表が５分野に分かれて提言を作成した。私もなるべく多く実現できる環境を整えようとしている。市長と語る会も週２回程度開いている。私は竹原氏時代の混乱を経験したことを糧として、市はまだまだ良くなっていく力があると思っている。竹原氏時代に市民に好評だった保育料の半額補助や市役所窓口の書類交付手数料引き下げなどの施策は続けている。これからも市民のサービスを充実させ、行政への満足度を高める。

インタビュアーから▶▶

竹原氏時代、約２年半で７回の選挙と住民投票が実施された。阿久根市民は地方自治への意思表示を何度も突きつけられ、有権者としての意識や市政への関心が高まった。市職員や議員は市民から厳しい目で見られるようになったのを肌身で感じている。自治体職員や議会と対立し改革を唱え住民をひき付ける竹原氏の姿は、手法こそ異なるが橋下徹大阪市長と重なる部分もあり、一定の支持も集めた。反竹原氏運動の中心に立ち、経営者から転身した西平市長が市民の不満や不安をくみとり、首長と議会という二元代表制度をどう切り盛りするのか手腕が問われるのはこれからだ。（鹿児島支局長　**近藤　英次**）

禁複製・無断転載